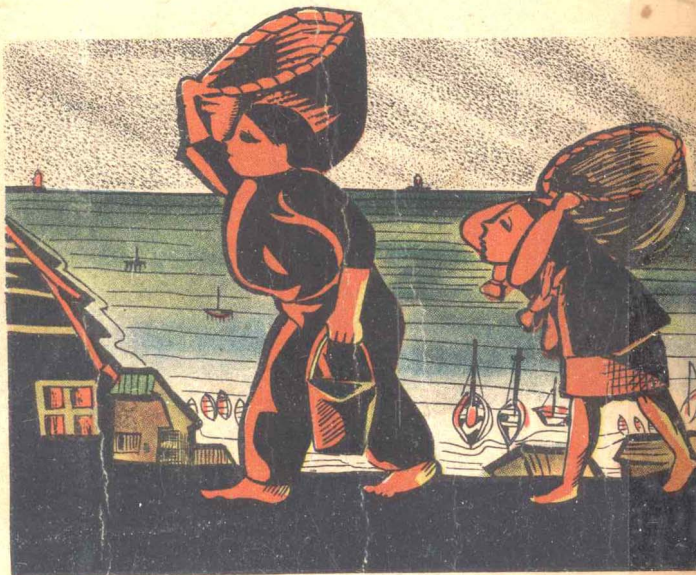


生きる

山田うた子



生 き る

山田うた子

新鋭創作選



理 論 社

生 き る

1955年4月1日 第一刷

定価 180 円

著 者 山 田 う た 子

発行者 小 宮 山 量 平

印刷所 株式会社 邦 英 舎 印 刷 所

東京都千代田区神田神保町一丁目六四番地

発行所 株式会社 理 論 社

振替口座東京九五七三六番

電話東京(29) 5668~9 番

硬 本 製 本

落丁本乱丁本はおとりかえいたします

読者 に

人民生活のなかには、もともと文学・芸術の素材としての純粋が存在しており、これは自然の姿の形をなしたものであり、あらけずりのものではあるが、やはり、もつともいきいきとした、もつとも豊かな、もつとも基本的なものである。——毛沢東「文芸講話」より

この本には、誰のころにも深くしみわたるふたつの力が、みちあふれています。

「これは、わたしのことだ！」——誰もが、そうかんがえるでしょう。形の上では、うた子さんとまいたくちがう道を歩んできた人でも、そう思わずにはいられないのです。お母さんも、姉さんも、おばあさんでさえも……日本の女という女のすべてが、同じ叫びをあげないではいられないような、そういうものを、体じゅうで書きあげたこと。——これが、この本の一つの大きな力だと思っています。

「こんなことなら、わたしにも書ける、いや、わたしも書きたい！」——そういうころのうずきを、誰の胸にもよびさます。ここに、この本の、もう一つの力があると思います。書きたい、書かずにはいられない……という気持が、誰の胸にももえあがっている時代の中で、じっさいに書くことの喜びと勇氣とをよびさますこのような作品が生れたことには、とくに深い意義があると思います。

何を書くべきか？　どのように書くべきか？——このふたつの問題を、身近にわかりやすく、みなさ

んの心の中でむすびあわせた小説。これを、小説としてのしむと同時に、こんな小説が、どうして生れたか、どういう意義をもっているか……ということまで、みんなで考えることができるような本をつくってみました。小説であると同時に、生きた文学入門として、みなさんの中で大いに問題にしてください。そして、何よりも、みなさん自身の中から「書く力」をうみだして下さい。

創作の過程から、本としてできあがるまで、病院の皆さん、『文学の友』の皆さん、そして作家やリクルの皆さんなど、じつに多ぜいの人々が、力をあわせ、心をむすびあわせて、やっと、みなさんにおとどけすることができるようになりました。出版するものにとっても、何よりうれしい本のひとつなのです。さし絵を書いて下さったのは安部公房氏夫人の真知さんです。みなさんに、心からお礼を申し上げます。

一九五五年三月

理論社編集部

目次

読者に……………	1
生きる……………山田うた子	
I 淋しい葬列……………	5
II ドンペ田……………	25
III 生きがい……………	55
IV とおい春……………	92
V 生きる……………	115
* ……………	
『生きる』が生れるまで……………サークル土曜会	158
『生きる』の誕生……………野間 宏	168

現代文学への輸血……………	杉浦明平……………	174
生活の深みの感動……………	足柄定之……………	180
無限に進歩する確信……………	藤原審爾……………	188
『生きる』の人々……………	戸石泰一……………	193

*

そうてい・さしえ
安部真知

I 淋しい葬列

真夜中の二時ごろだったとおもう。いつになくりんごや、お菓子を両手にもたされたりれしさと、こどもごころにも一家をつつむなにかしら異様な昂奮とで、私はうきうきしていた。まっ暗な窓ガラスに映ったりんごの赤い色がいまもはっきりと思いだされる。——これが私達一家の生活に八くぎりVをつけた「夜逃げ」の汽車旅だった。

昭和十三年の九月末、住みなれた蔵王山麓の村を、隣家にも気取られないように手早く、そのくせ物音もたてないようにひっそりと発ってきた一家が目ざすS市についたときは、もう日の出も間近いころだった。

駅前はずぐ海岸だった。鰯がうず高く積み上げられていた。どこをみても鰯の山。夜明けの光をうけ



て鯖はさえずえと銀色に光っている。ああ、これからはここで暮しはじまるんだなあ——私はこどもなりに新鮮なような喜びのような気持ちをした。とたんに、思わず、「うー魚臭え」といった。

どこもかしこも魚のにおいで一ぱいのS市で、私達が借りた家は、町はずれの山の上にあった。駅を出て右手にしばらくゆけば、角にこの辺としては大きな味噌醤油屋がある。そこからは人家もまばらの山道に入る。急勾配をのぼりつめるとゆるいだらだら坂となり、左手に荒れはてたところが雑草の中に見える。坂の中腹に塩や雑貨を商う店と米屋が並んでいて、その前にこの辺十数軒が使っている共同水道の栓がたっている。この塩屋が私達の大家であった。米屋と塩屋のあいだが細い露路になっている。その奥にでこぼこの切石で数段不細工に石段が畳んである。そしてすぐ切立った崖の上が山になっている。その石段の左手が狭い平地になっていて、ごたごたといりくんだ長屋の一群があった。山蔭になつていたので後から日光も風も通らなかつた。この長屋の住人は勿論のこと、この辺の部らく一帯は、他所からの流れ者が多かった。彼らはみな、生活に追いつめられて流れついた根無し草だった。

私達の家とはつきから二番目になっていた。天井も床もささくれ立っていて真黒だった。六畳と四畳半、それに台所が形ばかりついていた。そこに祖父母と父母、それに兄と姉と私、弟達三人の十人家族がひしめき合つて寝た。戸口を一またぎすれば隣の家だった。うしろはどぶで、その上からすぐ山になつていて切石二段ほど上つたところに便所があった。雨の日などは汚物があふれて家の椽の下に流れた。前は軒先すれすれに馬小舎があった。片隣りに住む馬車ひきのものだった。なにかの拍子に馬が勢よくけ上げたりすると、板のすきまから糞や飼葉が部屋にとんで来た。梅雨のころともなればすさまじ



かった。後からあふれてくる汚水と馬小舎から流れでる汚水とが一しょになって、我家の前はもちろ
ん、このあたりは一带がどぶのようになった。だから男も女もところかまわずこの辺で用を足す始末だ
った。たえられない熱気と悪臭がたてこもった。冬近くまでとびまわる蠅蚊のなかで、小学校四年生の
私は、いつも母親を困らせた。「空気のいいSの家さまた帰りたい。こんど帰ったらおらもうんと稼い

ですけるから。ね、母ちゃん」でも事情は追々
私にもわかって来た。S村を食いつめて出て来
た親達にとっては、Sはもう故郷ではないこと
を。

父はからだが弱く、始終咳をしていた。皆か
ら「ぜんそく持ち」といわれていた。無理なか
せぎもできないので海岸通りの橋ぎわに「こが
ね焼き」の小さい屋台をだした。学校が終ると
早々に、鞆を背負ったまま小走りで父のもとに
寄ってはいろいろ手伝いをするのが、私の毎日
の仕事になった。寒い吹雪の夜などは売行きが
よかった。「うーッさむッ」と立止って買って

行くのは大方は漁師だった。一つ焼いてどっさり砂糖を入れて一銭。いい機嫌の若い衆が「おーい一円」なんてこれればもうてんでこまいで、焼きたねがすっぱりとなくなってしまうほどだった。が、砂糖をたっぷり入れないとすぐ売れなくなるので大変だった。父と二人で一生懸命やったが儲けがうすいので、三カ月はかりでやめてしまった。

父は咳をしながら家にぶらぶらしていた。父が家にいるので、母が仿かなくては食べて行けなかった。母の仿きに行ったところは、繁華街に近いまちにある魚加工屋だった。一日中魚まぶれになって、仿いてもらう金は四十銭、それでも母はけんめいに仿いた。じいさんとばあさんが一家の乏しい台所をやってくれるので、母は仿いたわずかの賃銀を、じいさんに全部渡した。高等科をでた兄は会社の給仕に入っていたが、自分で食べるのが手一ぱいなので、九人の口は母の手一つで養われるわけだった。苦しい生活だった。ひもじい毎日が続いた。

五年生になった。父は魚市場の仲仕組の人夫になった。魚の水揚げや運搬の仕事をする組だが、入ると一カ月ぐらいで組がつぶれて解散になり、また仕事がなくなった。世話する人があってこんどは屑鉄の間屋の人夫になった。大きなハンマーや鉄棒で屑屋が持込む古金物を叩きひしいて一定の目方や形に整えるというこの仕事は、父の病弱なからだにはひどくこたえた。朝の咳きこみも激しくなり、目立ってやつれてきた。そして三カ月はかりでその仕事もやめてしまった。

しばらく家にいたが、そのうち小さな罐詰工場に仿きだした。母も同じ工場に通い始めたので、暮しはいくらかよくなったがそのうち母は出産のため工場をやめた。やめて二日目赤ん坊が生れた。広い額

の上の方にぼやぼやと薄い髪の毛をつけた女の子だった。一家は十一人になった。母は安閑と産褥にも
いられないので、間もなくまた魚加工屋に働きだした。仿いても仿いても貧乏だった。じいさんとばあ
さんは口べらしのためにと、遠い娘のところに行った。

「春夫、くらすに楽になったらな、すぐに手紙よこせよ、この年して好きで他所さ厄介になりに行
くんでねえがらな」

小さい弟を相手に年寄り達は同じことをくり返しくり返し愚痴っては涙をこぼした。小さい風呂敷包
み一つ持った後姿に、私は思わず大声で叫んだ。

「おばんつあん、なあに、うんとかせいで早く手紙やっからね」

ふり返ってうれしそうに笑ったばあさんの頬はべそになった。つーんと私も鼻が痛いような気がし
た。

年寄りがいなくなったので、御飯ときは私の仕事になった。朝まだ薄暗いころ起きて、御飯と味噌汁
を炊いた。母はすぐ加工屋へ、私は勉強道具を風呂敷に包み、赤ん坊を背負って学校へ、弟たちも騒々
しく学校へ出ていった。二つ年上の姉は小学六年を終るとすぐ織詰工場の寮に入ったが、父がまた身体
が悪くて家で寝たり起きたりしていた。乳をのませるため私は一日に二度母のもとに赤ん坊をつれて行
かねばならなかった。だから学校はたいいて一時間か二時間しか習わなかった。びしょびしょのコンク
リートのたたきの隅に、魚箱などをさかさまに置いて、母は遠慮そうに小さくなって乳を吞ませた。い

い気分になって乳首をふくんだままやすやすと眠る赤ん坊の頬を、母は指先でつつきつつき急いでのませようとした。

加工屋の仕事も季節でまたひまになった。こんどは松山

の山仿きだった。家をでて学校のほうに登り、なお先

へ先へと山地を登り下りして行くと、「谷地」

といわれている一面の湿地に出る。赤さび色

をした沼や青い沼など大小さまざまの沼があ

る。夏などこどもたちはそこで泳ぐのだが、

多勢で一度に入ると底の泥がかきまわされ

て、沼の水はどろどろとなった。その沼池をすぎて北に急

な勾配を少しのぼると、その辺一帯が松や雑木の山になっ

ていた。稼ぎ人は男女合せて十数人いた。男達は大きい木

を切りだすのだが、母達は松の枝を適当にそろえてこしらえ束ねる

のである。「丸」といった。一把丸って二銭だった。大きな枝から鉋や鋸で

小さい枝をとりそれをまた適当な長さに切っては地面にのばしておく縄の上に置いて上下二カ所をぎゅ

っとしめる。女にとっては相当な力仕事だった。おまけに縄は自分もち、一日中仿いてせいぜい二十五

把から三十把がやっとだった。



学校を一時で退けて家から二十分ばかりの道のりを私は赤ん坊をおぶってこの山に通った。母と一しよになって鉋をふるい鋸をもった。刃物で木の枝に少し切目を入れてから、その枝に身体ごと乗ってひょんととび上る。枝は急な重みで切目からボギッと鈍い音を立てて折れる。そのときの私のおどけた顔をみて、少し離れた木の根っこに細帯でつながれている赤ん坊が声をたてて笑う。



夕方、自分のつくった束も母のと合さって、監督が調べに来る。帳面につけられるのがうれしく、一把でも多くと、一心不乱に仿いた。空の晴れている日、名も知らない小鳥のさえずりを聞きながら、皆だまって仕事に精をだす。風向きでは港を出る船の汽笛さえボーとのどかにきこえて来た。広々と開けた見晴し、入りくんだ海岸線も、遠くの白い燈台も、緑の島も一望の下にあった。遠くかすんだ水平線、そして海は生物のようにキラキラと絶えず輝いている。私は結構楽しかった。

夕方は母より一時間ぐらい早く家に帰った。帰るときは枯枝や屑枝を大きく束ねて背中一ぱ

いに背負った。その上に赤ん坊をチョコンと乗っけて小さな両足を私の肩にまたがせ、可愛らしい両手を頭につかまらせてそれを私の手で落ちないように支えた。長屋の人達はいつも私をほめ者にした。が、こども達は「やー山女来たー」とはやし立てるのだった。赤ん坊を「猿コ猿コ」とからかった。が、こうして薪は半年焚く分もたまった。

兄はいつまでも会社の給仕ではとって、鉄道員になり近くの駅につとめ出した。入ったばかりではあるし月給は非常に安かった。

父は相変らずはかばかしくなかった。兄はある病、いい医者にも一度診てもらったら、といった。それは私の、そして家中皆の思いでもあったが、父は一言のもとにはねつけた。

「ろくに食うものも食えねえで医者さかかって何になる！」

だがそのあとで「なあに大した病気でもあんめい、ぜんそくなんだよ」と弱々しくいってふとんをかぶった。父は気が弱かった。世間に出ては全くのお人よしでおとなしかった。その反面、家の中ではひ



どくわがままで気がむらだった。父が何か気に入らないことでもあつて荒れるときなど、こども達は隅っこで小さくなつて、息をこらして見てゐるのだった。父ちゃんはからだが弱くて切ない（苦しい）んだ。思うように仿けないし、家が貧乏なのでイライラしてるのだ——と、私は自分の心にいいきかせて父の乱暴を許そうとつとめた。母はおとなしい一方の人だった。父がどんな乱暴をしようと、じつと黙つてしのんでゐた。

ある時など、父は、母がなにも抵抗をしないといつて怒つた。「この腑抜けめ、東向けといつたら日暮れるまで東つんむいてるんだべ」といつてなぐつた。

そのおとなしい母が仕事に出ようとしたある朝、父の枕許に坐つた。垢じみたふとんをそつとはいでいった。「父ちゃん、すまないけども少し仿いてけさい」。父の手が母の頬に飛んだ。むちゃくちゃにとんだ——。母は黙つて弁当包をもつて仿きに出かけた。そしてそれからは一度もそんな願ひは口にしなかつた。

もう少ししたら、来年こそはと、生活が楽になることばかりに望みをかけて仿いたが、かえつてだんだん生活はひどくなるばかりだった。私は家のため、親兄弟のためと、何でもやつた。春はたにしをと、芹、なすな、はこべを摘み、秋はくるみ拾ひ、薪とりなど、こどもに出来ることは何でもやつたし、またうまかつた。くるみは誰もが目をつけて奪ひ合うものだった。だから私は兄の勤務用の懐中電燈をもつて、夜中に木を叩いては拾つた。冬になるといくら少くとも五升くらい、多い年は一斗位もたまった。薪は学校の裏手の山にとりに行った。長い竹竿の先に港の工夫の使う「ノソコ（手鉤）」という

先が大きく鉤形に曲った鉄の道具をロープでがっしりと結びつけ、それを枯れ葉などの多い枝に引っかける。枝の伸びてゐる方向とは逆の方に竿をねじるようにして引っぱる。割にあつさりと枝は折れる。少し傍によけて枝の落ちてくるのを見ている。枝は静かにバッサリと地面に落ちてくるのである。そうすればあとは簡単で、鈍で小枝をおとし適当に短かくして東ねて背負うて帰るだけである。——私はこうして、山仕事のないときも家の薪を運んだ。

海岸には与えられた海の幸があつた。引き潮の入江には、わかめがあちこちに残される。長い棒の先にひっかけてはたぐりよせる。小さな筥一ぱい拾うことは大して難儀でもなかつた。またこの近くの漁村では海苔を養殖していた。ずぶずぶと泥の中に沈まないようにかんじきという麻糸の鼻緒のようなものをつけた厚い大きい板をはいて、流れて来るのりを筥に拾った。汁の実にしたり佃煮にしたり、皆の好きな御馳走であつた。浅利貝を拾うこともだいたい仕事だつた。私はどんな日でもただ仿いた。仿いた。

学校は決して楽しいところでも面白いところでもなかつた。四年生のときは男の先生で、五年と六年は女の先生が受持だつた。私は仕事なら誰にも負けずにやれたが、勉強は覚えが悪かつた。ことにたいていは赤ん坊を背負つて行くので、ろくろく勉強がでなかつた。授業時間中に泣きだされたりするととてもあわててしまい、席に居るのがいやだつた。だから一時間か二時間で帰つて来た。

学校では、私の存在などは殆んど無視されてゐた。先生が特別に目をかけてくれることもは、たいてい強持や有力者の子、そうでなかつたらよく出来ることもだつた。たまに、——それは母の仕事が休み